

Denis J. M. Bradley:

*Aquinas on the Twofold Human Good*

*Reason and Human Happiness in Aquinas's Moral Science*

Catholic University of America Press, 1997, pp.xiv+610

桑原直己

倫理の分野に限らず、トマス・アクィナスの思想体系の中でアリストテレス的な要素とキリスト教的な要素、一般的に言えば「哲学」と「神学」とがいかなる関係にあるのか、という問いはトマス研究における周知の根本問題であり、これをめぐっては古来無数の言説が積み重ねられてきている。本書は、「トマスにおける人間の二重の善」、つまりアリストテレス的哲学的な倫理とキリスト教的神学的な倫理との関係を問うことにより、この根本問題に真正面から取り組んだ本文 534 頁に及ぶ力作である。ジョージタウン大学にあって本書を執筆した著者 D.J.M. ブラッドリーは 1943 年生まれ、働き盛りのトマス研究者である。

著者の立場は挑戦的である。本書は、「トマスの道徳学は理性的な原理と論証に満ちている」とする通説の意味と限界について、改めて立ち止まって検討することから出発している。トマスの「道徳の理論」は明らかに理性的性格を持つので、多くの哲学者たちは、トマスの神学的著作から哲学的な倫理学が抽出される、と考えがちになる。しかしながら、著者は、トマスの自律的ないし体系的な道徳「哲学」は、概念的に不可能ないし不整合である、と主張し、現在に至るまで命脈を保ち続けている「アリストテレス的トマス主義」の伝統を根柢から拒否している。

もちろん、トマスの道徳学は、啓示された信仰に適合してはいるが、信仰に論理的に依存しているわけではないところの、理性的な教説を取り入れている。しかし、そうだとすると、その理性的教説が、そのまま道徳哲学になったり、トマス本来の神学的文脈から「トマスの体系的な道徳哲学」を引き出すための根柢となるわけではない、と著者は強く主張する。著者は、トマスの道徳学は完全に神学的でありかつ理性的である、と認めている。しかしこの特徴は、それ自身の固有な主題としての「啓示されるべきことから *revelabilia*」へと整合的に収斂する、トマスの、統一された「学的

な神学」の概念のもとに理解すべきである、というのが著者の立場である。

しかしながら、著者はこの結論に訴えることを急がない。著者の本領は、トマスの理性的な神学的倫理学と厳密に哲学的な倫理学との対比を十分に明らかにするために、トマスによるアリストテレス注解を丹念に検討することにより、トマスがアリストテレスをいかに読解したかを解明しようとする努力のうちにある。著者は、トマスが、勝手な読み込みは慎みながらも、『ニコマコス倫理学』を、トマス自身の神学的信仰と形而上学的な立場、特に、トマスの「分有」についての形而上学的教説を背景として読んでいる点を指摘している。

著者はまず、全巻10章のうちの4章を割いて、アリストテレスとトマスとの「実践的理性」をめぐる論説の異同について詳細に検討している。著者によれば、トマスにおける実践的理性は、論理的には自律的であると共に、形而上学的には神律的 theonomous である。「良知 synderesis」の知的な性向によって把握される実践的理性の第一の規則は論理的には自明的あるいは論証不可能な自然的な原理である。けれども形而上学的に見た場合、これらの同じ自然法の規則は、神の精神の中にある天地創造の範型である永遠法を「分有する」ものであり、神の被造物としての人間の精神の自然本性を反映している。

著者は、トマスがアリストテレスの実践的な賢慮 *phronesis* の基礎を、この良知についての神学的な概念の上に据えようとしている点を指摘する。アリストテレスの理論的な学は（*nous* の認知の活動を通して）自明的あるいは論証不可能な原理に基礎を置いている。ところが、実践的推論においては、アリストテレスは、偶然的で、個別的な行為の流動的な道徳的性格についての準感覚的な直観の力に *nous* の機能を限定している。それとは対照的に、トマスは、実践的「知性」を通して、我々が、ある特定の基本的で論証不可能な諸目的を「自明的に」命ずるいくつかの論証不可能な普遍的（つまり例外のない）規則を把握すると主張する。こうしたトマスの自然法理論の性格に関連して、著者は、「道徳の規則についての理論を解釈する上での唯一の適切な背景」としての、知性と意志との相互作用についての多岐にわたるトマスの心理的教説についてかなり詳細に立ち入った解説を行っている。

しかし、著者によるこうした実践的理性をめぐる詳細な分析も、より大きい問題——つまり本書の本題である善の二重性の問題——に対する「単なる序章に過ぎない」。トマスにおける実践的理性の規則の概念は、彼の（神学の）道徳的目的論のよ

り大きい文脈の中にかに適合的に位置づけられるのか?この点、著者によれば、トマスは「不完全な」至福と「完全な」至福との神学的な区別を導入することによって至(幸)福 *eudaimonia* についてのアリストテレス的観念に変容を加えている点を強調する。不死は、人間の完全な至福のための、十分条件でないまでも必要条件である、とするトマスの主張は、この区別に依存している。完全な人間の至福は、「天国 *patria* で」、死後に見いだされるが、それは人間たちが神の本質の直視を与えられる限りにおいてである。「神の直視」のみが、完全な可知的なものそして完全な善に対する人間の自然本性的願望を満足させる。

トマスにとって人間の自然本性的願望は神の直視としての至福を求めるもの、とされる。この神の直視への可能性をめぐるトマスの理性的な議論からは、人間の本性は、アリストテレスの自然本性の概念とは正反対に、それが自然本性的に達することができない目的を切望することとなり、哲学的には逆説を帰結する。過去、トマスの解説者たち、例えば、カエタヌス、フェラリエンシス、そしてパニエスといった人々は、この逆説を説明すべく精力的な努力を払ってきたが、著者の判断では、彼らの所説はトマス自身の教説と一致してはいない。また、著者によれば、17世紀以降、「純粋な自然本性の状態」についての近代的な神学論争が、人間の自然本性の未完結性についてのトマスの概念を一層不明瞭にした、という。

これらの論争は、人間の自然本性的目的なる概念に基づいた多数の、トマス的と称する哲学的な倫理学を生み出した。しかし、著者は、こうしたトミストの考え方は、正確にはトマスのものではない、と主張する。著者は、最も著名な20世紀のトミストたちのうちから、ジャック・マリタンとサンティアゴ・ラミレスの2名だけを取り上げて検討し、批判している。著者の見解では、トマスの神学的道徳学から体系的な哲学的倫理学を引き出そうとする彼らの努力が生み出したものは、(1) 道徳哲学と自らを誤称する道徳神学であるか(マリタン)、あるいは(2) 自らを見当違いにトマスの哲学的倫理学として提示しているアリストテレス主義風の哲学的倫理学(ラミレス)であるか、である。これらのトミストたちに反対して、著者は、トマスの真正な教説の行き着くところ、つまり人間の自然本性の未完結性はアポリアに帰着することを承認する他はない、と主張する。つまり、トマスに由来するいかなる道徳哲学も、正当にアリストテレス主義風の幸福主義 *eudaimonism* に戻ることはできない。しかし、それは、哲学である限りは、人間の究極の超自然的な目的についての神学的

な断言へと前進することもできない、というわけである。

以上が、本書における著者の主張の概略である。著者自身が認めているとおり、その立場はきわめて挑戦的なものであるので、賛否の評価は分かれるところであろう。

最後に、評者が一読して印象に残った点を一つだけ挙げておきたい。人間の「完結した自然本性」とか「自律的な哲学」といった観念は、アヴェロイストたちに端を発し、上述のとおり近代 17 世紀以降に大いに問題とされるにいたる。しかし、著者の指摘によれば、こうした観念はトマスにも、そして驚くべきことにはアリストテレスにも無縁である、という。著者によれば、アリストテレス自身は、人間の「完結した自然本性」を主張し、そのために「自律的な哲学的倫理学」を提唱したわけではなく、単に彼はキリスト教的な超自然的至福の観念を知らず、したがって自らが知っている人間の自然本性の限界内での至福論を展開したにすぎない、という。そもそも、「完結した自然本性」とか「自律的な哲学」といった考え方は、神学との対抗を通じて自己形成したアヴェロイストのものだ、というわけである。さらに、アリストテレスは、人間的至福が「不完全」であること——ただし、それは人間的至福が神々の永遠の至福と比べて不完全である、という意味であるが——さえ認めている。トマスは、こうした人間的至福の「不完全性」に対して、「完全な」至福としての「神の直視」を提唱するのであるが、だからといってアリストテレスに「神の直視」と比べた意味での「人間的至福の不完全性の認識」を帰するようなことはしていない、というわけである。我々は過去の思想を見る場合、どうしても後世展開され現在の自分を拘束している枠組み——この場合「自律的な哲学」という観念——を押し被せてしまいがちである。著者の指摘は、自分の枠組みを一旦捨てて、対象のありのままの姿に近づく、という一見簡単で難しい営みの一端を伺わせるものであるように思う。

---